

# 県人会 第二回 夏のイベント

## 「特別講演会・懇親会」開催

今年で早や三回を迎える岐阜県人会夏のイベントは、真夏の太陽が容赦なく照りつける中、例年通り昭和女子大学に100人を超える聴衆を集めて開催されました。

今回は、岐阜県出身の外交官で、第二次世界大戦中にリトアニアのカウナス領事館の領事代理として、日本を経由して第三国に脱出しようとした人々（大部分がユダヤ系）に対し独断で日本の通過ビザを発給し、約6,000人もの命を救ったとして国際的に高く評価されている杉原千畝氏を採り上げることとしました。

講師として、今年『謀報の天才 杉原千畝』（新潮社）という著書が出版された外務省外交史料館の白石仁章氏をお招きし、杉原千畝氏の知られざる側面について紹介して戴くことにしました。

なお、本講演では、時間の都合から世界的に良く知られたヒュウマニストとしての杉原氏の人道的ビザ発給事件の発端、成り行き、その後の反響などについては、ほとんど触れられていません。詳細は、前掲書で。

### 第1部 講演

## 岐阜県出身の外交官杉原千畝の知られざる偉業



講師：白石仁章氏

### 1. 杉原千畝の人物像

白石氏は、杉原千畝の魅力として「偉大な人道主義者」、「ロシア語等多数の言語に通じていた優秀な外交官」、「優れたインテリジェンス・オフィサー」の三点を挙げ、ともすれば従来の研究で見落とされがちだったインテリジェンス・オ

フィサーとしての側面に関する研究を重視しており、今日はそこに焦点を当てて話を進めるとのことであった。

杉原氏に救われた元避難民が、各国の在外公館が次々と閉鎖してしまい、リトアニアから逃げ出す方がほとんど見いだせない状況において、日本領事館だけが通過ビザを発給してくれたと語るので、どうしても人道主義者としての杉原千畝に脚光があたりがちだ。

白石氏は、「人道主義者としての杉原氏の偉大さは論をまたない」としつつ、杉原氏が優秀な外交官であり、インテリジェンスII 諜報能力に抜群に長けた外交官であったが、そのような実態は避難民や近親者に対するインタビューとは違った手法、すなわち地道な史料

調査・発掘によってのみ明らかになると指摘した。すなわち、インテリジェンス活動については、杉原氏は家族にも話しておらず、ましてや元避難民が知る由もないので、インタビューからインテリジェンス活動の実態を明らかにすることは非常に困難である。例外的に生前本人が手記や自伝の類を残している場合もないことはないが、杉原氏の場合には、簡単な手記を残しているのみなので、十分本人が語ってくれているとは言い難い。

### 2. 明らかになった インテリジェンス・ オフィサーとしての 杉原千畝

そのような状況下、インテリジェンス・オフィサーとしての杉原千畝の活動を明らかにするには、外交史料館に残っている戦前期の外務省記録ファイル4万8千冊の中から関連する史料を探していく必要がある。ところが、外務省記録ファイルは、外交官別にファイリングされており、案件別に分かれている。例えば、リトアニアにおけるビザ発給に関する史料は、「民族問題関係雑件 猶太人ノ部」というファイルに綴じられているが、その際にビザを発給した人々のリスト、いわゆるビザ・リストは、「外国人二対スル在外公館発給旅券査証報告一件」というファイルに綴じられているというような具合で、今回の講演は20年以上にわたって粘り強く関連記録を探し続けた白石氏の努力の成果でもある。特に、若き日の杉原氏の活躍が明らか



杉原千畝像 人道の丘公園(八百津町)

理解に苦しむ行動を示し、これは人援助問題に關して抗議するなど天津における日本官憲の白系露人援助問題に關して抗議するなど

実際には重光葵駐ソ連大使が、ソ連のストモニヤコフ外務人民委員代理(他の国の外務次官に相当する)と本件につき会談した際、ストモニヤコフは、本件とは無関係な天津における日本官憲の白系露人援助問題に關して抗議するなど

の裏切り」以外の何物でもなかった。時の平沼騏一郎内閣が「欧州ノ情勢複雑怪奇ナリ」の言葉を残して総辞職したのは、杉原氏一家がカウナスに到着したまさに8月28日であった。そして、その4日後の9月1日にドイツ軍は、ポーランドに侵攻し、9月3日にはイギリス、フランスがドイツに宣戦布告して第二次世界大戦が勃発した。杉原氏がカウナスに到着したのは、そのような巨大な歴史の転換期であった。

ソ連は、9月15日に日本とノモンハン事件の停戦協定を結び、9月17日にポーランド東部に侵攻、ドイツ・ソ連から挟撃され、ワルシャワが陥落したのは9月末であった。当時、ポーランドにはヨーロッパでも最も多数のユダヤ人が生活していたので、彼らの中には隣国リトアニアに脱出する者も少なくなかった。杉原氏に救われたユダヤ人とは、大部分がポーランド系ユダヤ

外務本省では、杉原氏に対して事実関係を取り調べたが、その際に提出されたのが、先の調書「杉原通訳官ノ白系露人

### 3. 謎のソ連による「入国拒絶」

かになった調書「杉原通訳官ノ白系露人接触事情」は、70年以上にわたって全く顧みられなかった史料であり、杉原氏が自分の言葉で語った貴重な史料と言える。この史料作成の経緯は、1936年末に在ソ連大使館に通訳官として赴任することとを命ぜられた杉原氏であったが、ソ連側は杉原氏を「好ましからざる人物」と見なし、ソ連の入国ビザを発給しようとはしなかった。理由は杉原氏がソ連に対して反抗的な白系露人(革命の色)赤に対して白、すなわち革命政権を好まないロシア人のことを指す」と親しいということであった。

接触事情」であり、外務省入省以来の活動が時系列的にまとめられている。これは外交官が若い日に自分の言葉で具体的な活動内容等を記した大変珍しい史料であり、例えば満洲事変の時の関東軍の態度を「恫喝的」という言葉で批判するなど、杉原氏のリベラルな人間性を垣間見ることが可能である。

ところが、この調書は杉原千畝研究のための第一級の史料であることは間違いないのだが、書かれている内容について白石氏は疑問を提示している。杉原氏は職務上白系露人と接触したことはないと言いつつ、彼の最初の夫人は白系露人であり、白系露人の諜報網を駆使して情報収集に努め、その結果北滿鉄道をソ連が満洲国に譲渡した際に、当初ソ連は6億5千万円を要求していたのを1億4千万円にまでディスカウントさせることに成功したほどであった。にもかかわらず白系露人とは接触したことがないと言いつつしたのであるか?白石氏はその理由として、ソ連側が何ら具体的な証拠を示していないことから、ソ連外交一流のブラフ(おどし)であることを杉原氏が看破していたのではないかと、その上で「インテリジェンス・オフィサー」としての原則である情報提供者(ネタ元)の安全を守る「一行為であった」と分析している。

杉原氏がついに具体的な証拠をソ連側に掴ませなかったことを意味し、諜報戦における勝利を意味する。

結局、ソ連は杉原氏の入国を認めなかったが、この一件によりインテリジェンスを重視する外交官、駐フランス杉村陽太郎大使や駐フィンランド酒匂秀一公使たちから、杉原氏はインテリジェンス・オフィサーとしての将来を囑望される存在となったのであった。

### 4. リトアニア赴任: 「欧州ノ情勢複雑怪奇ナリ」

杉原氏にリトアニアのカウナスに領事館を新設し、領事代理として赴任するようになり、辞令が出たのは、1939年7月28日のことであった。この日、杉原氏を含め5人のソ連通外交官にソ連ないしはソ連の周辺国へ赴任の辞令が出た。この当時ソ連ではノモンハン事件による本格的な武力衝突が展開されていて、軍事的に日本側の不利は否めず、陸軍大臣が外務大臣に外交手段による解決を依頼したのが7月15日のことであった。それゆえに、杉原氏も含めて5人のソ連問題専門家の派遣は、ノモンハン事件の早期解決のためにソ連の情報収集を目指したものであったと推測される。



リトアニアの杉原記念館(旧カウナス領事館)



人であり、命からがらポーランドから逃れてきた難民だったのであった。

## 5. 杉原氏のカウナス派遣の意義と成果

杉原氏のカウナス派遣は、本来ノモンハン事件解決のための対ソ連情報収集であったが、情勢は一変し、ドイツ、ソ連と国境を接したリトアニアという世界的な謀報戦の最前線において、第二次世界大戦関係の情報を探ることを求められた。杉原氏は、見事にその期待に応え、ポーランドの情報将校達と協力関係を築き、他方、積極的にユダヤ系避難民とも接触して集めた情報を本省に送り続けた。これにより杉原の情報が高く評価する来栖三郎駐ドイツ大使や大鷹正次郎駐ラトヴィア公使は、ソ連によるバルト三国併合にともない、バルト三国から日本の公館が引き揚げざるを得なくなった際に杉原氏の次の赴任地につき、対ソ情報戦の最前線に派遣することを強く主張した。その結果杉原氏は、駐ブラハ総領事代理を経て、1941年2月、ソ連国境に近いドイツ領IIケーニヒスベルクの総領事代理に任せられた。

この当時、ヒトラーは既に対ソ連開戦を決意し、着々と準備中であったが、同盟国であるはずの日本には伝えない意向であった。しかし、杉原氏は、彼を信頼してケーニヒスベルクまで同行したポーランドのダシュケビッチ中尉らをとまない、対ソ連国境付近まで潜行し、詳細にドイツ軍の動きを把握して、日本宛に電報したのであった。



インテリジエンス・オフィサー杉原千畝の最大にして最後の功績であった。しかし、本省サイドはこの貴重な情報を重視した跡は見られず、逆に杉原氏はドイツ当局からポーランドに同情を寄せ、ドイツを敵対視する人物とみなされ、にらまれることとなり、ドイツ国内から退去させよとの要求がもたらされた。日本側はやむなく杉原氏を在ルーマニア公使館に転任させ、日本の最も優秀なインテリジエンス・オフィサーの一人杉原千畝の活躍は終わりを告げたのであった。

最後に、杉原千畝について細谷雄一慶應大学教授は

「人の命を救うことは美しい。しかしそれは善意や情熱のみで実現出来るとは限らない。高い知性や冷静で柔軟な思考を伴ってはじめて、その営みは美しい果実となる」と評した。



レザミひだメディケアガーデン



Dr. Orishige

バイオゾン

住宅型有料老人ホーム



メゾンドүй

適合高齢者専用賃貸住宅

緊急時には医師のサポートがあり「安心」のお住まいです

高齢者に配慮した居住設計になっており、施設内に折茂医院や訪問介護・看護サービスがあり、介護が必要になっても心配なく暮らしていただけます。建物内1Fレストランでは、地元の新鮮な食材を使った美味しいお食事を召し上がっていただけます。一般の方にもご好評頂いております。

JR高山駅より徒歩7分、近くには大手スーパー、官庁街にも近く便利なところです。

高山市内中心地の閑静な住宅地ですので、たいへん過ごしやすい環境です。

ご見学・ご相談 随時承っております。

お気軽にお問合せください。

0577(37)0800・0577(32)8005

社団法人全国有料老人ホーム協会 会員

株式会社レザミひだ

岐阜県高山市昭和町2丁目85-1

<http://lesamishida.com>



●関連法人 地域医療 34年 医療法人同仁会

その意味から言っても、杉原氏は単なるヒューマニストでも、まして熱血漢でもなかった。  
 彼には、難民に注ぐ暖かい眼差しと同時に、今、目の前で困窮している難民を

## 第2部 懇親会

講演会終了後、講師や講師のお子さんも交え、100名を超える参加者による懇親パーティが開かれました。

「土曜日の、夏休み直前のお子さんでも参加しやすい時期に」という夏のイベント本来の趣旨に沿った形で幅広い層（5歳〜88歳）の参加が得られ、また、会場がいつもの大広間ではなく、普段は、学生食堂として使われている一角になったので却って親しみ易さが増し、会場のあちこちから嬌声が発せられるなど楽しい一時となりました。

「夏のイベント」もこれで3回を迎えますが、今まで3回とも会場までたどり着くだけで熱中症を心配しなければならぬほどの強烈な暑さの中で開催されたにもかかわらず、いずれも100名を超える参加者を集めました。

救うことが将来の日本のためになるという信念があった。すなわち、真の国益を追求できる希有な外交官であったと言える。

これは、講師に時宜を得た話題性のある方々をお願いしたこと、回を重ねて夏のイベントが定着し始めてきたことなどにあるとは思いますが、今後なお一層の発展を遂げるためには、講演に限らない魅力ある企画などの工夫も必要だろうと思われまます。

会員の皆さまの有益なご提案、叱咤激励を期待していますので、県人会HP（ブログ）を通じてお寄せください。

URL <http://apsifu.net/>

